

風の缶詰

瀬和伶次

窓ふきの少年は見とれていた。

風の軌跡を表現するかのような彼女達の飛行。

野原の花を優しく撫でる柔い風かと思えば、切り立つ海岸へと身を波しぶきごと打ちつける荒い風になる。

どちらとも無く、そのものとしてあろうとする精神。

彼はその精神に魅せられた。

四人の少女。彼女達は微笑み、まるで檻の中でダンスパーティをしているようだった。

貴族は彼女達の踊りを風踊と呼ぶそうだ。

フツと、照明が落とされる。

ごく小さな音が四つ。四人が壁面の金具に捕まった音なのだろう。

照明が再び灯されたとき、檻の天井付近の止まり木にひときわ派手な衣装の少女が立っていた。

観覧席のガラス越しに低く男の声が聞こえる。くぐもつており何を言っているか少年には聞き取れないが、お

よそ予想はつく。

少女が跳び、翼を広げた。

彼女は檻の壁に沿うように螺旋を描いて降りていく。

速度はみるみる増していき、先ほどまで飛んでいた彼女達の比ではなくなった。そして檻の底近くへ達する。

少年は窓ふきの布を握りしめた。観客席の貴族も席を立つ者が数名。

少女はその速度のまま軌道を変えて檻の中央に向かい、最上部へと上昇をはじめた。目指すは少女が初めに立っていた止まり木。

少年が息をのむ。

壁面で待つ四人も彼女を見守る。

彼女は最後にぐんと大きく羽ばたき、そこに腰掛けた。

大きく翼を広げ、にこりと笑った。

少年が着替えに戻る頃になっても、まだ貴族達は盛り

上がっているようで、壁の向こうから声が聞こえていた。

「おい、お前」

少年が呼ばれて振り向くと上司の男が居た。

「覚えてるな。手を抜いたらどうするって」

男は少年から布を奪い取り、ホウキを押し付けた。

「鳥籠の掃除もやっておけ、バカタレ」

男が去った後、少年は服の埃をブラシで落として、次の仕事場へと向かった。

ステージに数時間前の華やかさは無く、風の舞っていたのと同じ場所には思えなかった。

少年は檻の底に入る前に見上げて、誰も中に居ないことを確認する。

金色の格子と一体になったガラス扉を開いて檻に入ると、妙なおいがした。

底面には多くの羽根が舞い散り、積もっていた。

少年はホウキでかき集めようとしたが、底にはり付いているようで上手く集まらない。

しゃがみこんで素手でかき分けると、羽根は赤くねばつく液体で底にはり付いていた。

「ごまかしてるんじゃないぞ」

怒号に驚き辺りを見回したが、どうやら少年に対する

ものではなかったようだ。

檻とその更の上に於ける鳥小屋とをつなぐ通路から聞こえているのだろう。

「私の言う通りに演技しろと言っただろう。最後は止まり木に立つのだと。座るんじゃない、立つのだ」

ガンと金属棒を床に打ち付ける音が聞こえた。

「この子にはあれが限界よ。私達にだって。あんな無茶な飛び方できる人なんて」

「居ないとしても。いいや、居たのだ。過去に同じことをやってのけた奴が居るのだからお前達にもできるはずだ、そうだろう」

「だけど彼女はそのせいで」

少年は掃除を続けることにした。

ときおり響く金属音。

それでも少年は掃除を続けた。

次の日、上司と呼ばれた。

「昨日のが評判になったそうだ。『歴史的名演を見逃す

な』ってな感じでな。だから今日も窓ふきを頼むぜ」

いつもの通りに窓をふき終わりしばらく経つと、飛踊が始まった。昨日より一人少ない、三人だった。

少年はすぐに着替えに戻った。二日も続けて檻の中を掃除できるほどの体力はない。

「おい、お前」

振り返ると上司の男だった。

「手が空いているようだな。おい、安心しろ、ホウキを渡しにきた訳じゃない」

男は少年に鎖を渡した。

「それを鳥小屋まで届けてくれ。始まった今からだと遠回りしないと行けないからな」

男は自分の仕事場へと戻っていった。

少年は外の搬入用通路を通り、鳥小屋へと向かった。

「ああ、ご苦労」

聞き覚えのある声だった。

男が部屋の奥を指差す。

「あいつの横に置いておいてくれ」

彼女だった。

部屋に入りつまずきそうになった。床がところどころゆがんで、赤くさびている。

鎖を置くととき、彼女と目が合った。

「おい」

鳥籠へと続く通路に居る別の男が呼んだのだ。

男は少年と彼女を残し、通路へと階段を降りていく。二人は何か話し合っているようだ。観客の盛り上がり

がいまいちだのどうだの、と。

彼女はまだ少年を見ていた。口を開く。

「わざわざ持ってきてくれたのね、ありがとう」

少年は戸惑った。

「ギリギリで脱出して美しく飛ぶ、のだって、私」
フフ、と笑う。

「姉さん達はできないって反対した。あの男はできると言うけど。……昨日のことは、あの人には完璧にできたことだった。でも今日からやることは、あの人にだつて絶対にできないことよ」

鎖を手を取った。

「私はどっちだろうな」

少年は彼女の体が震えていることに気付いた。

「心配？　でも怖いからじゃないわ」

ポタリと液体が滴る。

赤い香りだ。

男が通路から上がってくる音が聞こえる。

「あら、もしかして私を逃がしてくれるつもり」

少年は黙っている。

「残念ね、それは無いの。飛ぶために、楽しませるために生かされているの。貴方も、籠の中で飛んでいる私が好きなのでしょう」

「ん、おい。お前、何してる」

「それに。私のための飛び方、忘れちゃったわ」

「邪魔だ。部屋から出てろ」

男は少年を押しつけ、鎖を手を取った。

少年は去ろうとしたが、足を何かにひっかけて転んだ。

また床につま先をたかと思っただけが違った。

別の檻の娘がつま先をつかんでいた。

娘は少年を黙って見つめた。

少年は涙を流した。意味は自分でも分からなかった。

「うわっ、何をしゃがる」

少年は男を静かになるまで叩きのめした。

鎖を巻かれた彼女に手を差し出す。

「私の邪魔をする気」

少年は首を横に振った。

彼女が通路へ降りようとする、少年は彼女を押しとどめて、その鎖を外した。

彼女が少年をにらみつける。

「邪魔しないって言ったじゃない」

少年は再び、首を横に振った。

「じゃあ何のつもり」

少年は口笛を吹いた。

びゅうびゅう。

人差し指を立てる。

びゅうびゅう？

びゅうびゅう。

彼女は首をかしげるが少年は続ける。

「何が言いたいのか分からないわ」

びゅう……。

「風は風らしく在ってほしいだけさ」
少年は翼を広げて劇場から飛び去った。

終

月刊缶じうす 一月号 通巻 205号
2014年12月22日発行

編集人 黒兔

印刷所 広島大学 文団BOX